

# 鎧の權三重帷子

作者 近松門左衛門

留守一大名の留守邸  
たしなむ一心が  
濱の宮一田雲の  
流鏑馬一騎射の  
式  
美男草一とろく  
を出ににてかく  
いふ(但言集也)  
女若一女と若衆  
かん強く一七行  
本肝の字を宛つ  
さんせう一産所  
か  
しゆみの髪一威  
をいふ武用弁  
略  
大坪流一大坪道

君八千代、國は治る御留守にも、弓馬たしなむ梓弓、馬の庭乗遠乗と、遙に出し濱の宮、鳥居通の流鏑馬馬場、竝木に落る風の音、とどろくと打波も、乗分けつべき器量こそ、表小姓の數々の、中にも笹の權三とて、武藝の譽世の人に、鎧の權三は伊達者の、どうでも權三は好い男、諍ひ離らす美男草、女若二ツの戀草を、飼にかふたる月毛の駒、前脚とつてかん強く、雪嚙碎く白泡に、さんせうよしや尾は青柳の、しつたりしたりしたく、かつしくと歩まする、大坪流の鞍の内、稽古に心染手綱、搔繰くりく乗拍子、「はい」とかけたる一聲に、兩口放す奴が髭も、共に跳たる駿足や、袴の裾に風受て、小波寄するしゆみの髪、しつくと乗戻し、引廻し乗る袖摺の、松も女松の十八公、其年比の振袖の、京染模様菅笠は、家中で誰の娘ぞや。お乳母らしいが小風呂敷、

禪流の馬術  
十八公一松の字  
とも雪の十八歳  
にかく  
糸薄一戀を含め  
る目元  
荒駒一あるにか  
く

せめ馬一馬を馴  
す事

まかう一事に託  
して離れさす

權三見る眼の糸薄、ちらりほらりと馬の先、除る振して邪魔をする。權三それぞと見し人の、心に覺え荒駒も、色にそばへて足早き、はいく聲をかごとにて、馬ぞ迷惑痴話の鞭、打くれく駈けさする、轡の音ははりりんく、泥障の音はばたくく、叩く嵐や馬場先の、すよの笹原さらく、さらくさつと乗飛びくく乗飛せ、蹄を陸地につけばこそ、二町五反の馬場の内、息をもつがず半時計、達者を見せてぞ三重せめ馬の、鞍も鎧も汗に成、乗止むれば小者馬取、「もふお仕廻か」と走寄る。鷹ヤイ丁稚、殊の外汗に成た。一走り歸つて著替の袷持て來い。馬取共其間宮へ往て休息せい「ない」といふより中間共、休む方には足早く、立去る跡につるくと立寄て、足の爪先鎧共にしつかと取、駕久しう御坐んす權三様、御無事で目出たふ御坐んする。是見ぬ顔も能い加減にしたがよいぞや。かはいそに馬も骨折らせ、今日一時に稽古せねば叶はぬか。左程私が嫌ならば、最前から除けず共、何故此馬に踏殺させて下さんせぬ。エ、此方様はなふ侍のぬけくと、能ふ嘘を吐かしやんす」と睨む眼の中おろくと、女は涙脆かりし。響はお雪どの、人にこそよれ川側伴之丞殿の妹御。君傾城をなぶる様に、權三が嘘をつく物か。少も心かはらね共、下々の奴等まかふ爲、中間めらが見付ふか、と馬に

好い手！よい加減

もつしやれたが  
一七行本もつし  
やれたか

目代云々―監督  
者の地位にある  
我は同類

十八皿豆―江戸  
にては十六皿大  
版にては十八皿  
こい ふ奴師勢  
ど( )  
あべかこふ―赤  
目  
り  
わさと―うつか

乗ル心もせず、氣が宙を飛ぶ様で、是此如く汗かいた。地躰乳母、お主が不調法。旱敷の  
人目も有もの、若い女中に異見もせず、此様な遠駆け 御家中ふつと名が立つては、此權  
三御奉公がならぬ。申交した詞は違へぬ。サア同道してお歸りやれ。早ふく」と乗出  
す、轡取て引留め、乳乳母が不調法とは、好い手な事仰れな。やいの權三様、よもや  
忘れはなされまい。去年の冬私が宿で、お雪様とお前と逢せた時、是限りとおつしやれ  
たがサア何と。たつた一夜切に切賣にする娘御じや御座らぬ、アウ忝も。それから梨  
も礫もせず、お文の往く度毎に、此方から返事せふ。どれ何處に一度の返事もなされた  
か。お雪様の父御様母御様は御座らず、目代になる此乳母はぐるなり、伴之丞様へたつ  
た一言云人して、つい御祝言濟む事。サア奥様に持たしやるか、但否か。否なら嫌と今御  
意なされ、思案が有。ほんに私が育てよ自慢じやないが、男に指もさよせぬ。甘い盛り  
の十八皿豆、柔かな内を一口食ふて、せよりさがして置ふや。そりや成ませぬ。ア、あ  
べかこふ」とぞ喚きける。權ヲ、女中の氣では恨尤。文は落散る遠慮深く、返事せぬ  
は身があやまり。御舎兄伴之丞とは、御膳番の淺香一之進に茶の湯の相弟子、心易い朋  
友なれ共、申憎いが味な氣質で、むさと物のいはれぬ仁。若い者の口から、御自分の妹

念入―七行本念  
は入  
したくめさせ―  
七行本したく  
めさせ

八幡―弓矢八幡  
の略にて誓の詞

情―精か

下されとは、何共それは恥しし。然るべき媒頼み、兩方へ挨拶あれ。我らは合點、件之丞さへ呑込まれるれば、用人衆迄伺ふて、其上は縁次第。此詞を違へなば、たつた今此馬から眞逆様に轉りと落ち、踏殺さるゝ法もあれ、心底變らぬ變らぬ」と、いへばお雪がにつこりと、笑顔に開く小風呂敷、雪是此帶の縫見て下さんせ。丸に三ツ引お前の御紋、わたくしは裏菊、能ふはなけれど私が細工。大小の締る爲、中入に念入たれど、くけ口がお氣に入まい。去ながら、末永ふ縫したよめさせねばならぬ。どれぞ媒頼みて本式の云入はお前から。是はまづそれ迄の心頼み。此帶の如く如何迄も、お腰本を離れず添纏ふてや。そふじやぞや」と、鞍の前輪に打懸る、其手を取てじつと締め、鹽何ふもいはれぬ嬉しい心、八幡我らも心底かはらぬ。此馬も聞て居る。畜生の心は人よりも恥しい。こりや證據に立て。馬よ聞たかく」と、いへ共いかな馬の耳、風に嘶く計なり。權三帶疊んで、懐に押入、「あれく濱手から栗毛馬の遠乗は、舎兄伴之丞」雪「ハアほんに乳母、兄様がそれ其處へ」乳「ヤア旦那様かこりやならぬ。見付られては後の邪魔。サア先此方へく」と、本社の方へぞ走りける。程なく伴之丞乗來り、「ヤ權三お身も遠乗か。いかふ情が出て、馬持が能い故に、其月毛も一兩年めつきりと能クなつた。買人があ

けなす一悔る詞

當言一あてこそ  
りせて一馴らし

角一鎧のふちの  
四角なる處、馬  
の腹をうつもの  
(貞丈雜記)

らば賣て仕まひ、五兩も七兩も利を取て、又跡から安馬買置、乗入して賣たらば金持に成  
筈、よい藝覺えて仕合せ」と、人をけなす口癖。權三氣だてを能く知て、「チ、サ少身者の馬  
の手入、飼を碌にかはぬ故、見懸計で爰はの時の用に立ぬ。御身達は大身、人手は多し飼は  
よし、すはといふ時かん強く、歩み勝つはお身の馬。祕藏召され」といひければ、伴ム、  
其云分は、先度二の丸の櫻の馬場で、其月毛に此馬が歩み負た當言な。サ一馬場せめて勝  
負せふ。サア乗れく」と氣を喘たり。鷹、イヤサ心へたといひたひが、今迄乗て、お見やる  
通、人馬共に草臥、只今歸宅。重ねてく。小者共來いやいと、いへ共いつかな聞入ず。  
伴、イヤ草臥とは負用心。勝負せねば堪忍せぬ」と、手綱を繰て乗出す。權三も今は力なく、  
馬には一息つがせたり。我身の汗も入方の、月毛の駒に櫻狩、祕密の手綱繰控へ、繰緩め、  
左右に輪をかけ違へ、互に負じと二三遍、入かへく乗たりしが、權三が馬は逸物の、口を  
切て角を入「ハウツ」と懸たる聲の内、一散に駈出す。伴之丞が栗毛馬、鞭影に尻込し  
て、打ても引てもしやくつても、前脚搔て高嘶し、躍上り跳上り、鞍にたまらず伴之丞、  
屏風返しにどうど落ち、木の根に腰骨打當「あいたく」といふ聲に、馬取中間草履取、主  
人の恥も打忘れ、一度にとつとぞ笑ひける。權三驚き飛で下り、「怪我はないか」と立寄

御意得た一も目  
に懸つた

眞の臺子一臺子  
は茶の湯に用ゐ  
る棚にて眞行草  
の三種あり(貞  
栗集)

秘事は云々一語  
にて秘傳は聞い  
て見れば易きも  
のぞ

東山殿云々一足  
利義政より傳へ

れば、年こりや權三、相手はお主が月毛馬、此方へ渡せ切て捨る。馬を渡せ。あいたく。  
腰を揉め中間共、うぬらも首があぶない」と、權三が方を尻目につけ、相手知れずの一  
人腹。權三もいはれぬ挨拶と、身を控へて立たる處に、進物番の岩木忠太兵衛、六十八  
でも生得堅氣、赤銅月代剃立て「ヤ御兩人是にか。御宅へも參るべきに能い處で御意得た。  
東御家老衆より御狀到來。此度若殿御祝言相濟みお悦び、お國に於て當月下旬、近國の御  
一門方御振廻御馳走の爲、眞の臺子の茶の湯なさるべしとの事。是によつて、我等が聲  
淺香一之進も留守なれば、御家中弟子衆の中、眞の臺子傳授の方へ、御廣間本式の飭物  
等勤めさせ申せ、と御留守御家老衆より仰付らるよ。とは申せ共、何方が傳授なされた  
も存せぬ故お尋申。此度の御用に立ば、第一は御奉公、其身の手柄、聲の一之進も本望  
何んと御兩人、聞覚えもあつて茶の湯の名を取ふなら、此度なり」とぞ語りける。我慢者  
の伴之丞、「ハア、眞の臺子易い事。傳授許しは請ね共、秘事はまつけ、何でもなない事。色  
いろわれら存じて居る。數年の稽古は此度。御用は拙者承はる。心安ふ思召せ」思、それは先  
珍重。權三殿は御存じないか」罵されば、存じた共申されず、存せぬ共申されぬ。惣じ  
て是は茶の湯の極意。家々の傳多けれ共、師匠一之進一流は、東山殿より嫡傳、一子相

た秘事

非の入る—非難  
を受ける

鬩の馬にも云々  
—盛にて獲も木  
から落るの類

初昔—三月の季  
より廿一日目に  
摘みたる茶、廿

傳の大事なれば、權三躰が茶の湯で、傳授許請ふ筈も御座らね共、師匠の咄し聞はつゝた  
義も有、大概非の入ぬ程の御用の間には合せませふ」と、詞の中より伴之丞、「ハテ斯程  
大事の晴の御用、間に合せて濟む物か。此御用は伴之丞が一人して勤むる。忠太殿、其  
通り心へ召され」といひければ、思「いや我一人の儘にもならず、娘ながらも一之進女房、  
かれが所存も有べき事。假初ながら眞の臺子の傳授事、過失有ては殿の恥、諸事談合つ  
くが能い筈。サア御兩人御歸りか、いざ御同道致そふか」兎も角も」と伴之丞跛ちがく  
腰を引。忠太兵衛頗憎く、「此方は腰をおりなさるゝが、疝氣でも起つたか」伴「されば  
されば、拙者程の馬の名人なれ共、龍の駒にもけつまづき、馬から落て落馬いたした」と、  
片言やら重言やら。忠太兵衛おかしさ、彼奴なぶつてやらんと思ひ、「馬から落て落馬し  
たとは、いかふ念の入た落馬。痛むが道理。何方も落馬が流行やら、生駒新五左が瘡も、妙  
薬一服でかけもさよ落馬いたす。我等は今朝他所へ参り、大事の精進をつい落馬いた  
した。此様に落馬の流行時、むさと云分などなさるとな。首が落馬いたそふぞ」と、盡  
口いふも茶の湯者を、掣に持たる三重身の習ひ。昨日は今日の初昔、世の口に合ふ茶の  
名所、人は氏より育ちかや。淺香一之進の留守の宿、おさるはさすが茶人の妻、物數寄

一日は昔の字なれば云ふ(安齋隨筆)

尺一宇治にかくゆかしく一四九三十六にあてたり  
敷松葉一階次に松葉を敷くは茶の湯の式なりかく成一掻くと斯く  
景清云く一調曲景清にある句ぬく奴一痴呆め

奔走一大事にする事

も能く氣も伊達に、三人の子の親でも、きやしや骨細の生れ付、風忍ばしくゆかしくの、三十七とは見へざりし。數寄屋廻りの掃拭ひ、下女中間にもいろはせず、箒木放さぬ奇麗好き、爐路の飛石敷松葉、石燈籠は苦むして、巖となれる手水鉢、植込の謠木の下蔭の、落葉かく成迄夫婦存命で、子共の末を高砂の、松の榮や祈るらん。中息子虎次郎棹竹横たへ、年季の角介杖提げ、爐路の中に走入、晴景清是を見て物々しやと夕日影に、打物閃いて切てかよれば、こらへずして刃向たる兵は、四方へばつとぞ迹にける」二人「ゑいやつとうく」とぞ打合ける。まゝ「ヤイくくく、餘程にあがけよ其處なぬくめ。見ん事男の數に入ながら、江戸の供さへ得仕おらず、小さい子を相手にして、怪我でもするか數寄屋の壁に、疵でもついたら何とする。これ虎次郎、彼の馬鹿を相手にして、日かな一日悪あがき、一々に帳に付、父様お歸りなされたら急度告る。待て居や」と叱られて、罵いや母様、悪あがきはしませぬ。わしは侍じや。鑓つかひ習ひます」まゝ「これなふ、そなたも最ふ十ヲじや。其合點がいかぬか。侍は侍知れた事。去ながら父様を見やいの。御前も能く御加増迄下された。武藝は侍の役珍しからぬ。茶の湯を上手になさると故、人の用ひ奔走も有。幼少時から茶杓の持様、茶巾さばきも習ふて置や。永



連れて戻れ七行  
本での字なし

音羽山―山城音  
羽燒

けんてーきつう  
見えて

繪に書く云々  
繪に書いた美人  
は只姿形のみな  
れど吉野の花を  
心で見れば髪髻  
と動く様に見ゆ  
る、お菊が殿御  
持た時の姿が  
あり見ゆると  
なり  
めやすかるべし  
―見よからう

永の留守の中、子共が悪ふ育つたといはれては、かよが浮名も恥かしい。男の子は男の手、祖父様へ往て大學でも讀習や。馬鹿よ、供して暮方に連れて戻れ」と、内外迄に氣を配る。留守こそ心盡しなれ。お菊はさすが姉だけの、「母様いかいお世話、ちとお休み」と指出す。薄茶茶碗の音羽山、おとなくれたる振を見て、「チ、孝行な、能ふ云やつた。温順うなりやつた。妹のお捨は乳母と遊びに出たそふな。行水も仕廻ふてか。髪は誰が結ふた、萬が細工と見へたの。髻がま少と下つた。額もけんて愛相がない。髭の出し様鬢付で、善ふも悪ふも見せる物。顔の道具相應に、眉が女子の大事の物。前髪も斯でない、母が直してやりましよ」と、開く櫛箱鏡臺の、此鏡より世の中は、人こそ人の鏡なれ。人の振見て我振の、善きも悪きも身の手本。繪に書く筆のすさみには、京や大坂の上臈も、心で見れば今爰に、冷泉吉野初瀬の花も見る。殿御持ての朝寢髪、湯上がり顔や洗ひ髪、人にな見せそ亂れ髪、寐亂れ髪の枕にも寐顔は猶もつよましや。容儀は生れ付なれば、只嗜みは黒髪の日出たからんこそ、女はめやすかるべし、とつれぐ草にも行といの。兎角女子は髪かたち、千筋と撫る櫛の齒に、身持行義の解きほどき、子を思ふ手につやくと、見かはす程に見へければ、さうその、各別好い子になりやつた。嘘なら

肌身—七行本は  
なかつ身  
むつくり—はや  
はや

其鏡を見や。親の目は最良目、他人が證據。萬來いよ。飯焚の杉もちやつと來て、お菊が髪つき見てくれい」下女あいく」と走出、「是はく、奥様いかひお上手。額付髪つきで、下地の好いお顔が猶美しうならしやんして、女子でさへ辛氣が涌く。肌身をむつくりと抱て寐たい」と譽るも有、杉がはたと手を打て、「ア、そふじや、日比の不審が今晴れた。私が鏡で顔を見て、木地は随分好けれ共、人が惚れぬ。異な事と思ふたが、髪の様はつかりで、可惜此身が埋木じや。慮外ながら奥様の手に二三日かよつたら、お國中の男は、秋風に薄の穂、靡けてやろ」とぞざよめきける。さう親の子を譽るは嫌らしけれど、此様な娘を大躰の男に添はせるは妬ましい。常々つくづく思ふには、御家中で聲を取らば、表小姓の笹野權三様に添せたい。器量はお國一番、武藝よふて茶の道も、弟子衆に續くはない。そして氣立といふ物が、萬人にも憎まれぬいとらしいかた氣。男の生粹々々と、いへばお菊は童氣の、「申母様、權三様は大人で、叔父様の様に有ふ。わしやいやく」と頭掉る。母「ア、わけもない。母は三十七の酉、父様は一廻り上の酉で四十九、これ十二違ふても、見ん事我身達の様な子を持た。權三様は一廻り下の酉で廿五、そなたは酉で十三、十二の違ひは丁度能い似合比。まあ二三年して良も直し、脇

長門印籠一脇を  
詰めて嫁姿にな  
れば丁度似合ふ  
事、此印籠は秋  
月長門守の製に  
て馬の皮にて作  
り髪をよく保つ  
（江戸塵拾）  
持ずば一七行本  
持ねば

名酒一味醂

比翼一ツ身に  
て雌雄連る鳥  
（三才圖會）

つめたらしつくりの長門印籠。ほんに四人酉の年、是も不思議。榮耀云はずと殿御に持  
や。其方が否なら母が男に持ぞや。ほんに一之進殿といふ男を持ずば、人手に渡す権三  
様じやないはひの」と、子を寵愛のあひたてなく、時の座興の深戯も、過去の悪世の縁  
ならめ。「サア此上に衣裳著せ替え、打かけさせて見せふぞ」と、娘自慢の鼻脂、手を引  
奥にぞ入にける。立關に「物もう」茶の間の萬が「どれい」と應へ、出迎へば笹野権三  
一樽持せ、巖木忠太兵衛殿は是に御座らぬか「萬ア、毎口お見廻なさるれど、今日は  
未だ見へませぬ」蠟ム、然らば奥へ申てくりやれ。此中は御不沙汰、お留守何事なく珍  
重に存じまする。ちと申度事御座れ共、委細は忠太殿迄申入ませふ。此一樽は上方の名  
酒、稚い方のお慰み、お見廻の印と、お次手に申てくりやれ」と、いひ置歸れば、萬ア、  
申、先暫く」と走入。女房はや立聞て、さゝ「御口上聞た、待請た様な事。苦しうない、  
お通りなされと、申ませ」と櫛笥鏡臺片付て、塵掃く羽根の二つ羽も比翼の悪縁底深き、  
笹の権三は遠慮ながら、常の居間にぞ通りける。さゝ「是は能ふこそ。お見廻と申、子  
共方へとお心付、珍しい御持参。折々立關迄お出下されても、態とお日にかゝる事もな  
し。して御用とは何事か。親忠太兵衛迄もなく、直にお咄遊ばせ」と、隔てぬ挨拶まめや

鐘の權三重帷子

印可一許した爵  
明書

通れぬ云々！是  
非許さねばなら  
ぬ弟子

女房と云は一七  
行本女房といふ  
には

かなり。權三手をつき、「御親切忝し。忠太兵衛殿か、御舍弟甚平殿を以申ス筈。近比粗忽の願ひながら、今度御祝言御振廻の御馳走、眞の臺子の飴り、一之進弟子中との仰渡し、常々一之進殿お物語り、一通りは聞覚え、未だ指圖繪圖の巻物、傳授口傳許し印可を受ざれば、押はなして眞の臺子覺えたとは申されず。天下泰平長久の御代、斯様の事を勤めねば、武士の奉公秀がたし。數年の懇望今度の大願、巻物拜見を許されば、生世々の御厚恩」と、額を疊に押下て、師弟の禮義見へければ、まゝ扱もく、御執心御奇特なお心入。此傳授は一子相傳にて、我子の外へは傳へられず。通れぬ弟子は親子の契約有ての上、繪圖巻物も渡す事。それに付、次手がましい近比粗相な、藪から棒と申そふか、寢耳に水と申さふか、思召も如何なれど、折がなくと兼々心にこめし故、申出して見まする。姉娘のお菊を、此方様へ進ぜ度と常々私が望み。今も今とてお噂申せし折柄、斯ふ申せば如何やら臺子の傳授と換々にする様で、娘の威も落ち、大事の傳授の詮もなし。それはそれ、是は是の談合で、菊を其方へ進ずれば、掣は子の相傳、一之進聞れて満足。第一私が戀掣。押出して好い女房と云は限のない事。先大抵目鼻揃ふた祕藏娘、添はする殿御は、こな様除て外にない。なんと合點して下さんすか」と、いへ

當座の色云々  
其場限りに契り  
し女はあつたに  
しても

二度具足云々  
此誓を破つては  
二度と具足を肩  
にかけぬ即ち武  
士を捨る事

橋がなければ  
謎にて手がくり  
がなければ物が  
成立せぬ

共恥しけにさし俯伏て返事せず。さう「サア如何で御座んすぞ。ハテ何の是が恥しい。扱は娘がお氣に入ぬの。ム、頭掉しやんすは否でもない。エ、知れた。疾から外に約束がある。有そうな。左様ぢやく。主ある花は是非がない。可惜男に戀がさめた」と、立退けば、翼ア、是は迷惑、誰共我等約束なし。木石ならぬ若い者、當座の色は各別、極めし事はゆめゆめなし。師匠の聲と申せば聞へもよし、娘御お菊殿、私妻に急度申受ませふ」さう「ハアウ、忝いお嬉しい。サア望は叶ふた。お侍の詞、底を押すは如何ながら、媒なしの縁組、證據の爲ちよつと御誓言聞ましたい」鹽御念入は、尤、二度具足を肩にかけず、一之進殿の指料に刻まれ、骸を往還に曝す法もあれ」と、云せも果す、さう「ア、もふ能ふ御座んす勿躰ない。今日は吉日、今宵臺子の傳授の書、印可の巻物渡しましょ。それお供の衆戻せよ。先娘には逢せませぬ。私に似たらば定て悟氣深からふ。側へ心散さず一筋に頼みます。悪性があつたらば、此姑が格氣の腰押。お持せの名酒、お前と私が此樽に、斯ふ手をかければ契約の盃した心。橋がなければ渡りがない、臺子が縁の橋渡し。此樽も橋渡し」橋にて祝ふ鵲の身も紅に染る共、世に諺はるゝ端ならん。又立關に老女の聲、「女子衆少頼みましょ、川側伴之丞妹お雪と申者の乳母、ついしかお目にか

からねど、お慮外ながら奥様へ、密にお咄申たさ。お雪使ひやら何やら、押かけて参りし由、頼みまする」と云入る。権三はつと色違へ、「扱々思ひも寄らぬ奴、何用有て参つたぞ。我等には大禁物、見付られては迷惑。どふぞ脱て歸りたい」と、うろく眼に成ければ、さうハテ伴之丞の侍畜生。その妹の乳母何の氣遣。侍畜生の因縁聞て下さんせ。主有私に執心かけ度々の狀文、夫ある身を踏付にする不義者。御用人衆迄訟へ、恥かよせてと思ひしか侍一人すたるといひ、一之進殿歸られては生死の有ことと、中使の下女に隙遣たれば、兄の不義の使に妹の乳母が來たそふな。直に逢ふも口惜い。留守を遣ふて、奥から様子を立聞せふ。女子共挨拶して、いふ事はせてつい往なせ。権三様をも彼の婆々が、見ぬ様にそつと脱して往せませ。夜に入人も沈まつて必お出。傳授の卷物渡しましよ」と、云捨奥にかくれ入。萬は氣轉才覺もの、目ませ頷き権三を圍ふ袖屏風、萬なふくお乳母殿とやら、此暑いに老人の御太儀な。どれ汗拭ふて進せふ」と、顔にべつたり手拭の縮みと皺ともみくさの、どさくさ紛れ忍草。権三はぬけて歸りけり。萬餘り拭ふて良が痛いか。折角のお出に、奥様は今朝より親里へ参られ、緩りと逗留有はづ。何なり共私にお語りなされ」といひければ、乳それなら此方頼みま

縮みと皺一結の  
手拭で皺の顔を  
拭く混雜粉れに  
権三忍び出る

骨は盗むまい  
無駄骨折はさせ  
まい

長鳴云々一鶴の  
鳴聲の長く引く  
は不祥なりとの  
俗説  
法界一帆をかく

しよ。養ひ君のお雪様と申と、笹の權三様と云交せの事あれ共、媒が無ふて御祝言が遅なはる。殊に此乳母が働きて、一夜の枕をかはさせた。其禮に權三様より、雪駄一足銀一兩是が證據。侍の妹に侍が疵付ては、退引ならぬ大事。爰の奥様ちよつとお口を添へらると、波風たよずつる埒の明様に、權三様と内證の跡さきしやんとしめて有。御子様方も有からは、錢金出して御祈禱さへなさるよじや御座らぬか。人の爲のよい事は山伏入らずの御祈禱。首尾能ふ相濟み、相應の御禮、そこは乳母が吞込だ。此方も骨はぬすむまい。表へ計の取結び、偏へに頼み上まする。始ての長口上、ホ、く、く、く、アウおはもじや」と饒舌ける。萬是なふ、そつちの心に長ければ、聞耳には猶長い。此方の奥様は禮物取て、肝煎する奥様じや御座らぬ。殊に酉のお年で、此方の様な長鳴が忌事じや。早ふ往んで下され」と、愛想なければ手持悪く、乳ム、ウ私は戊で丁六十、狼狽歩いて棒に逢はぬ先に、長吠せずと往にましょ」と、逆吠してぞ歸りける。奥には得手に法界格氣、瞋恚の怒綱きれて、静めかねたる折節、「父岩木忠太兵衛、只今是へ」と若黨先に告げければ、家内おそれ鎮まりて、おさるも可笑からねども、親に愛想の笑顔、忠ヲ、一之進の留守、皆機嫌能ふて満足。虎や捨めが能く遊んで、晝寐をせず睡たい、歸つて

やかましからう  
一八釜しかつた  
らう

わせーお出て

傳授めさー傳授  
せられよ

夕暗ー云ふに  
か、次のさすが  
に鎖すをかく

早ふ寝たいといふて、連立つれだつて歸かへつた。夜が短い、早く寝せて疾せきく起し、晝あがかせたが萬病まんびやうまん圓えん。姉は奥にか。娘の子は十三四から、端近はしちかく出さぬがよい、姉や捨すてめはお身に似たが、虎めは一之進いちしんに生寫いんぎやうし。こりや、一之進江戶えきより歸かへつたといふて、母が側そばへちやつと往いけ」と、孫寵愛まごちゆうあいの戯たがれ。さうテ、久しう遊びやつた。祖父様祖母様やかましからふ。奥へ往おどて姉と竝ならんで寝ねしやや。乳母うはよ寐ね冷えさせまいぞ。やい角介かくすけ、戻もどつたら何故なせ燈籠とうろうに火は灯ともさぬ。日が暮くれたが目に見みへぬか。女子をとこども、祖父様のお慰なぐさみ、今の名酒めいしゆを少あひと上あませ」ともてなせば、忠ちゆういやくく名酒めいしゆより何なにより數寄屋すきやの庭には毎日まいにち見ても見飽みあぬ。一之進いちしんの物好きものずき、心が伸のびておもしろひ。ヤ豫かねて内意ないい咄はなした笹さの權三けんざう、眞しんの臺子たいすの願ねがひにはわせなんだか」さう如何いかにも懇望こんぼうなされし故ゆゑ、卷物まきもの渡わたす約束やくそくに極きはめました」出で來こた出來た。若わかい和郎わらうの奇特きせきな、諸藝しよげいの心掛こころがけ頼たのましい。仕損しそんじあれば一之進いちしんの過失あやまり、殿でんの恥ち辱じやく。祕傳ひでん遺いさず傳授でんじゆめ召めさ。さりながら家の大事だいじ、譯わけ知らぬ下々いぢごんにも一言いちごん一句くきう聞きせまい。隱密おんみつ々々く。更ふぬ先に歸かへらふ、提灯ちやうちんとほせ。皆みな宵よひから寢やすませ、夜敏よせきに留守るすをいひ付つきやれ。又明日またあす見廻みま申まそふ。ヤイ角介かくすけ、男おとこといふはおのれ一人いちじん、門背かきせ戸こに氣きを付つけい。何をいふても、晝ひるでも駈角いびき介けだ」と。老おいの戲言ぎげん夕暗ゆふみに、歸かへれば跡あとは門もんの戸こを、さすが數寄者すきしやの



露は螢か一露の  
光るは螢火と紛  
ふ

はつしりーしつ  
ぱり

庭の面、若葉の木立物古て、爐路ほの暗き燈籠の、火影宿かる熊笹の、露は螢か、蛙の聲の喧く、萱屋が軒に音づれて、しよろ／＼流れ水の音、夜も森々と更にけり。おさるは椽先に、家内は寐入、ほつしりと、何を思ふと咎め手の、無きが我屋の取得にて、涙も袖に落次第、「エ、思案する程妬しい。大躰の男を可愛娘に添はせふか。我身が連添ふ心にて、吟味に吟味、思ひこふだ稀男なればこそ、大事の娘に添はするもの、悋氣せずには置ふか。晝の婆々めが吐し頬、お雪様と權三様と内證しやんとしめて有エ、腹が立妬ましい。悋氣者とも法界共、いひたか云ゑ。傳授も瓢箪も何のせう。臺子も茶釜も糸瓜の皮。エ、恨めしい腹立や」と、身を椽桁に打付て、灑す涙の袖半、絞る茶巾の如くなり。さゝ「ハアウア、思へば、悋氣も因果か病か。是程悋氣深ふては、我男を手放して、海山隔て能ふ置ぞ。能々お主は怖いもの。皆心の氣隨から。姑が犂の悋氣とは悪名の種、さらりと思ひ忘れふ」と、拂へども猶胸焦す、涙は癖となりけり。契約なれば笹の權三、供をも具せず、靜に門を叩く音、内にも答へず走出「誰じや」笹の」とばかりに明る戸を、入より早くはたと閉め、さゝ「直に數寄屋へ」と手燭片手に傳授の箱、二人忍びし有様は、人の疑ひ有べしと、我身に見へぬ障子一重、叩て數寄

祝言云々一色々の儀式に用ゐる臺子  
みすの中一御座に見上をかく  
行幸の臺子一道幸柳の事か

うつそり一鼻をあかしてやらう  
いきばね一息の根  
鏡一梅の蓋  
葉山云々一筑波  
山葉山繁山茂けれど思ひ入るには障らざりけり  
(源古今集)  
跡から一七行本  
下に來いの二字あり  
上ぶり一逆上あり

屋に入にけり。是は繪圖の巻物、祝言、元服、出陣の臺子。これみすの中の茶の湯の圖、誠の眞の臺子とは、此行幸の臺子の圖、三幅對三ツ具足、壺飴りの品々、印可の卷許しの卷、これを讀ば口傳入らず。心靜に緩々とお讀なされませ」權三戴き繰返し、讀ば世間も靜りて、蛙の聲も更渡る。折しも川側伴之丞、四斗入の明櫛下人に持せ、一之進が屋敷堀の廻り、うそく耳をそばだて小聲になり、「ヤイ波介、内には能ふ寐たぞ。おさるが寢間へ忍び込、口説おほせ、積る念を晴し、色の上にてたらしこみ、眞の臺子傳授の巻物してやり、權三めにうつそりさせふ。若し人が起あふても女小者、口へ砂でも頬張せ、いきほねを揚さすな。それ鏡突抜け」雫まつかせ」と踏つくれば、底も鏡もすつほりと抜たるを、枳穀垣にぐんぐつと、葉山繁山繁けれど、茨障らす思ひ入、抜穴道とぞなりてけり。伴、おのれは四方見合せ、跡から」と伴之丞、そろりくと這潛り、扉に出れば數寄屋の内に、燈火の影は障子に男と女、忍び逢夜のさよめ語。頷き合ふて顔と顔、寄てしつほり濡れの露、寢て仕廻ふたかまだ寢ぬか、染々うまい花盛。伴之丞も氣は上ぶり、裾はお留守を念かけて、先陣越された宇治川に、膝ぶりくの流れ武者、咽を渴かし立けるが、權三が聲で、「ハア誰ぞ庭へ來たそふな」さうハテ晝さへ人の來ぬ

あるは定—居る  
は必定

こらへ袋—堪忍  
袋

處 夜更よみけて誰たれが來くるものぞ」蠲い、ヤ今迄いまない鳴なたる蛙かへるがひつしやりと鳴な止やんだ」まゝ「ア、蛙かへるも少ちと寢やすまいでは。きよろ／＼せずと先卷物まづまきものども讀よしやんせ。あれ又蛙かへるが鳴なきます」  
といふ中に、波介なみせ樽づを潛くぐつて庭うちの内うち、主從しゆうじゆう一所いしょに立たやすらふ。蠲いあれ又ひつしやり鳴な止やんだ。どふでも誰たれぞあるは定ぢやう。ちよつと吟味ぎんみ」と、刀かたな追取おつとり出いでんとす。まゝ「是遣やらぬ。三方たかへいは高塀たかへい、北きたは茨垣いばらがき、犬猫いぬねこも潛くぐらぬに、人ひとの來くる筈はずがない。獨ひじりりての氣遣きづかひ。扱めはお前まへと私わたくし斯しかうして居ゐるを、妬ねたむ女子をなごが喚わめきに來くる、其覺おぼえが御座おんざんすの」蠲い是こゝは迷惑めいわく、左樣さやうの覺おぼえ微塵みじんもない」まゝ「いや有ありやある。媒なぐさが口くちを添そへればつい埒らちの明あく様に、内證うちじゆうしやんとしめて有ある。エ、／＼／＼女の身みの墓はかなさは、表うはべばかりに眼めがくれて、胸むねの中うちを知らなんだ」と、わつと計はかりの腹立はらだち涙なみだ。「これ背せからくら／＼燃返もんかへるを、姑しよめが聲こゑの悋氣りんきと浮うき名ながいやさに、笑顏えんげん作つくつてこらへ袋ふくろ、ふつつりと緒をが斷きれた。これ見みよがしの其帶そいおびは、定紋ぢやうもんの三ツ引さんびきと裏菊うらぎくと、小じたたる引ひん竝ならべ。誰たが縫ぬふた、誰たが遣やつた。嚙斷かみちぎつて退ひふと飛とかゝり武者振付むしやぶりつく。蠲いハテ此帶このおびは様子やうすがある」まゝ「ヲ、様子やうすが無なふては、様子やうすといふが妬ねたましい」互たがひに泣なくやら叩たたくやら、帶おびぐる／＼と引解ひらき、疊たぐみかけて擲なり打うち、「エ、嫌いやらし手てが穢けがれた」と、手繰たがつて庭ににひらりと投なげ、拾ひろへといはぬ計成はかりなる、思おもひの闇やみぞ詮方せんかた

二重廻—女の普通の帯

肝のたばね云々—二ツの膽の繋ぎ目、くいくはぶすく

ア、愚な—ト下の句に續けたり

なき。二人の影ははらく髪、如何にしても此態、帯解ても居られず」と、庭に出んとする處を、ア、く帯に名残惜いか。不承ながら此帯なされ。一念の蛇と成て、腰に卷付離れぬ」と、引解いて投出す。權三餘りにむつとして、「二重廻りの女帯、致した事御座らぬ」と、同じく庭に投出す。隙さす拾ひ伴之丞聲を立、「一之進女房、笹の權三、不義の密通數寄屋の床入。二人が帯を證據、岩木忠太兵衛に知らする」と、云捨て抜て出る聲。權三南無三寶伴之丞、弓矢八幡邊さじ」と、刀引抜き障子蹴破り飛んで出、燈籠の火の影薄く探し廻れば、波介がうろたへ廻るをしつかと捉へ、「伴之丞は何とした」渡私を捨て出られた」權三エせめておのれを冥途の供」と、肝のたばねをくいくく、ゑぐればぎやつと計にて、二刀にぞ留りける。直に逆手に取直し、弓手の小脇に突込む處を、おさる縄つて、「こりや何ふぞ。不義者は伴之丞、身に曇りないお前が何んの過り。死なふとは」權三ア、愚かな。二人が帯を證據に取られ、寐亂髪の此態、誰に何と云譯せん。もふ侍が廢つた。此方も人間はづれの畜生になつたか」權三如何成佛罰三寶の冥加には盡果たはお前も私も人間はづれの畜生になつたか」權三如何成佛罰三寶の冥加には盡果た」さる「淺ましい身に成果たか。はあつ」と計にどうど伏し、消入やうに歎きしが、さる「エ

不請ながらい  
やては有らう  
が

五臟—肺、心、脾、  
肝、腎、  
大腑—大腸、小  
腸、膽、胃、三焦、  
膀胱

エ是非もない、最早此二人は生きても死んでも廢た身、東に御座る一之進殿、女房を盜ま  
れたと後指をさよれては、御奉公はおろか、人に面は合はされまい。とても死ぬべき命  
なり、只今二人が間男といふ、不義者に成極めて、一之進殿に討れて、男の一分立て進  
ぜて下されたら、なふ忝なからふ」と、又臥沈む計なり。眞いや是不義者にならず、  
此儘で討れても一之進殿の一分立、死後に我々曇ない名を雪げば、二人も共に一分立。  
如何にしても、間男に成極まるは口惜い」まゝ「ヲ、いとしゃや、口惜いは尤なれど、跡  
に我々名を清めては、一之進は女敵を討あやまり、二度の恥といふもの。不請ながら今  
爰で女房じゃ六じやと一言いふて下され。思はぬ難に名を流し、命を果すお前もいと  
しいはいとしいが、三人の子をなした廿年の名染には、私や換へぬぞ」と、わつと計歎  
きくづをれ見へければ、權三も無念の男泣き、「五臟六腑を吐出し、鐵の熱湯が咽を通  
る苦しみより、主の有女房を我女房といふ苦患、百倍千倍無念ながら、斯ふ成下つた武  
運の盡き、是非がない。權三が女房」まゝ「お前は夫」眞「エ、くくく」忌々しい」と繩合、  
泣より外の事ぞなき。眞「サア家内の眼の覺めぬ中、夜も短し、早立退ん」と引立れば、  
まゝ「可愛や三人の子共が、母が今此態で、住馴れた此屋敷を退く共知らず、何事か夢に

六道四生一六斗  
四升の音あり、  
四生は胎卵濕、  
化、樽より出ら  
れぬは六道の辻  
に迷ふにたとよ  
七つ頭午前四  
時前

油壺から云々  
油の機に光澤あ  
つて女をして枕  
惚たらしむる美  
男

見て、すやく寐入る寐顔に、暇乞を」と泣きければ、鷹エ、未練な。一之進に首尾能ふ討るよより、浮世の願ひ何か有」と、引立門をあけんとすれば、門外に提灯人足、扉ぐはたく大音上「岩木甚平、笹の權三に逢ひに來た。誰も臥さつてけつかるか。あけよく」と呼はつたり。さあハア、悲しや、弟の甚平。門からは出られぬ。裏門はなし掘高し」飛んづ押つうろつく間に、家内は起る、門は叩く、前後に眼を付く茨垣、「ヤア悪人めが抜穴、我身に神の御利生」と、二人手を組む生死の巷、命の界四斗樽に、六道四生ぎつと詰つて動かれず、跡へも先へも酒樽と、共に逆様さかどんぶり、ころく比は曉月の、時は夜明の七つがしら、二つ頭に足四本、胴は一つの酒樽に、歩む無明の酒の酔、これぞ冥途に通ひ樽、契りは偕老同穴と、一つ棺に一つ穴、何處ぞに埋んで桶の輪と、云はねど物がいはせたる。

權三おさる道行

歌 鐘の權三は伊達者で御座る、油壺から出す様な男、しんとんとろりと見とれる男、ど  
うでも權三は好い男、花の枝から翻れる男、しんとんとろりと見とれる男、いとしい男。

二挺の尺一蔵に  
 二挺の弓は引か  
 ぬとあり、爰は  
 おまろが權三と  
 一之進と二人の  
 夫を持つたたと  
 ふ  
 放さぬ先一不義  
 せぬ前にばれ  
 た  
 出石一但馬にあ  
 る山  
 潤裕一「伊豫の  
 潤裕はいくつ左  
 八つ右は九つ中  
 は十六」(源氏頭  
 書)  
 櫛楓一輪播いて  
 にかく  
 くすみーじみな  
 有様  
 大工どの云々一  
 若みどり巻四に  
 ある唄  
 一腰は道芝一  
 本の刀は旅費に  
 窮して賣拂ひて

戀慕はれし、二挺の弓の本箭の、放さぬ先に絃断れて、引れぬ方にひかれ行、獨留守寢  
 の床の内、心も澄て眼も冴て、しんきくの空悵氣、終に我身のあだし草、世のそしり  
 草浮草に、浅香の水の漏れ初て、笹野の露の置きまどひ、寢まどひ歩みまどひては、古  
 郷忘れぬ二人が涙、涌て出石の山はあれど、戀の病は印なき、但馬の湯桁數ふれば、  
 我とそもじは五つと七つ、十二違ひの月更て、姉ともいはば岩枕、かはす枕が思はくも、  
 影恥かしや野邊の草、そなたは人の女郎花、おれが口から女房とは、身の櫛楓いたづら  
 に、染めぬ浮名の村萩の、亂れ泣くこそあはれなれ。振上げ見れば源の、鬼神退治の  
 大江山、峰は青葉に包まれて、谷も峰上も森々と、山の態さへ愛相なく、くすみきりた  
 る、松の下蔭、藪の小蔭の一在所、あれくくく、麥搗く鳴等隣の姉が、三十計で  
 鐵漿振袖、それでも戀の一節や、駈大工どのよりナフ鍛冶屋が憎い。閨の鑰鍛冶がうつ  
 シヨガへ。なふ鍛冶がうつ。閨のかけがね鍛冶がうつシヨガへ」のふ鑰の、關の鎖の  
 解初て、迷ひ初しは誰故ぞ。若い殿御を我故に、くすおれ姿二腰の、其一腰は道芝の、  
 露の値と消る果て、一本芒荊残す、腰の廻りは秋の暮、淋しや悲しいとほしと、抱き合  
 ては泣ばかり。國に親と子東に夫、思ひは千筋百筋の、我は涙のをがせ繰る眞字をくる

眞字一問男にか  
海士にだに七  
行本海士にも  
さりとは一嗚呼  
ひよくとなく  
一松の葉卷三の  
唄をとれり  
露の征原一當時  
の流行歌にて生  
玉心中にもあり

さりともと云々  
一履古今集に  
「さりともと昔  
は末も頼まれき

とや、世の噂、手で堰かぬる川水に、洗ふ帷子播磨湯、碌に寝ぬ夜の眼もとほくと、粟埃まぶれの髪容、鹽焼く浦の海士にだに劣る、山田島の歌鳥威し、さりとは鳥おどし、粟の鶉や澤の田鶴、ひよくと鳴くは鶉、小池に棲は鴛鴦、鴛鴦のしかも孀の夫の留主守、男鰥の憂住居、鳥の上にも歎かれて、いとど涙の種ぞかし。跡に夕立つむらく雲に、さつと吹來る風の音、野邊の薄の戦ぎまで、我を追來る追手かと、歌露の笹原ヤットン、連立走る踏分け走る、磯の千鳥をおつかけて、鑑擲んですんずと伸しやるく。サア忍いさつさ、忍いさくく、忍い笹葉の鑑の鑑先に、外す小鳥もなかりしに、今は羽風も恐ろしく、船は乗合人目せく、徒歩路急けどはかゆかず。何を知邊に難波津の、名は住吉も住憂しと、世の憂節も伏見山、染めぬ袂も捨る身は、心ばかりを墨染の、里に忍びて三重送りける。

下の巻

さりともと、昔は末も頼まれず、老の憂身の限りごと、古歌の詞も思ひ知る、岩木忠太兵衛立關前、淺香一之進方より、小袖簞笥、挾箱、葛籠、長持、其外嫁入道具一ッ色



老ぞ脱身の限なりけり」とありて二句頼まれずは七行本に頼まれきと直したり

まぢやうもの一眞正直者

ごくに立ぬ一投に立たぬ事

積重ね、「不義人の諸道具返納」と、呼はり散して歸りけり。母は持病の血の道に、おさるが事の其日より、癩の痞癩に胸痛み、いとど枕も上らぬに、母「なんじや道具が戻つた。聲共孫共縁切れたか 情なや」とよろほひ出、「なふ聞事も見る事も、悲しい事ばかり」と、葛籠にかつばと抱き付絶入ばかりに見えけるが、「如何成天魔の障礙ぞや。此様な事仕出すさもししい氣は微塵もなく、まぢやう者の孝行者。子も尋常に育てよ、母様聞て下され、私は娘もたんと持、嫁入の時の諸道具を一色も散さず、子共躰ける便りに、少身の我夫に余り苦にかけともない」といふ詞が違ふにこそ。廿年に成道具、古びもせず持なす此心で、そもや悪事を何んのせふ。物の見入か報ひか」と、又口説き立泣けるが、「一之進の身に成ては口惜い善なれど、余りに是はつれない。子共に譲つてくれもせず、見苦しい門に積せて、我子の恥は思はずか。ヤイ中間共下女共よ、余り人の見ぬ中、はやはや内へ運んでくれ」と、歎きあせれば忠太兵衛、「是々お婆々 聞て居ればくどくと、何をごくにもたよぬ事。一之進には過りない。男一所にうつて捨る女の諸道具、一之進が留て何にせふ。人間外れし女、汚れし道具、武士の家が穢るよ。中間共片端に叩き割り、火を付けて焼て仕廻へ」中間共「畏つた」と棒さい槌、鋤鍬、鉞ひつさけく立懸

堪忍めさー堪忍めされ  
他國の聞へー下に「もうしるめたし」の句を入れて見るべし

門火焚くー生きて返らぬ證、道具出た後、門の右方にて焚く（堅入記）

聞く二人ー葎にかけて葎を開け

る。母は堪えかね手を擴げ、「待てくれく。なふ祖父様、道具惜うはなけれ共、今生でも來世でも、おさるが貞はもふ見られぬ。手に觸れた道具、せめて一色は老の形見に残したし。家敷を欠落する時も、唐高麗に居るとても、さぞ忘れぬは子共が事。常々遣たかくと、思ひし念も不便なり。一色つつも残して、子共に取らせて下され」と、葛籠引寄せ箆笥に縋り、もだへ悲しみ泣ければ、思「これお婆々、今是が悲しいとは。お身も我もま一度は、大きな悲しみ聞ねばならぬ。其時二人は何とせふ。年寄ては憂事を聞が役と覺悟して、じつと涙を堪忍めさ。身も堪忍く」と、一圖に堅き國武士の、咽に涙ぞ語りける。思「何と思案して見ても、此道具請取ては、傍輩中の思はく他國の聞へ。若黨中間共、煙高いは憚り、一色つと取分々、焼て捨い」といひ付られ、迷惑ながら主命、葛籠箆笥、挾箱、引散し打碎き、海士の燒火と燃上り、煙に見へぬ。佛に、母は猶も身を悶ゑ、「可愛やおさるが嫁入の時、まあ爰で門火を焚き、千秋萬歳と祝ひし其道具、門火の跡で灰となす。母がからだ諸共に、薪となしてくれぬか」と、歎くを見ては下女はした、若黨小者に至る迄、皆々袖をぞ絞りける。残つたは長持一ツ。取分て燃せ、と聞く二人の孫娘、兄弟抱合泣居たり。祖父も祖母も夢心地、「やれくあぶなや。命冥加な

ば二人の孫が出  
たと也

娘を母に云々  
藤に女の子は女  
に付る

茶筌鬘一髻の先  
を茶筌の横に結  
ぶ  
霰釜一釜の外  
面に小き疣並びつ  
きたるもの

孫共や。もし火を付たら能い物か。堅い父御のいひ付か。何故に聲を立ななんだ。器用に生れついたよな。花紅葉の様な子共を、母めは能ふも見捨た」と、髪搔撫て泣ければ、お捨は何の頑是なく、「母様に逢たい。母様呼ふで」と泣計。姉のお菊は温順しく、「父様は母様を切に行とおつしやる。祖父様祖母様頼みます。代りに私を殺して母様助けて下され」と父様に佗言を」と、膝にもたれ伏しければ、思ヲ、能ふいふた。母は左程に思ふまい。虎次郎は何故越されぬ。娘を母に付るは離別の作法。此方に隔の心はない。孫三人を朝夕に見たらば、憂さも紛れふ物。此子は父御の四十二の二つ子にて、祖母がお捨て付たが、今は父母兄弟が、世の捨者になつたか」と、口説き繰り身も萎れ、枯木の様成祖父の良、涙に分ちなかりけり。「泣なく大事ない。なんほ母めが捨てても、祖父や祖母が可愛がる。甚平といふ叔父がある。サ、来い」と手を引いて、泣々奥にぞ入にける。茶筌鬘いひ甲斐もなき身なれ共、武道を研ぐ霰釜、たぎる心は運次第。浅香一之進の歸國を直に門出と、三人の子を片付て、氣は廣けれど先しばし、お國の内は憚りの、笠深々と舅の門、今迄とは事かはり、案内なしも無禮なり、物もふも角立つ。暇請一禮の傳もがな、と立關見入立たる處に、舅忠太兵衛瘦骨高く引褰け、鍋のつるほ

一人物にも相  
手なきに騒ぐ事  
も出来ず

なふ一之進し七  
行本になふ是市  
之進

ど反に反たる朱鞘ほつこみ、一文字に駈出る。「ア、申々」と袖引留め、笠取て捨ければ、思、ヤア一之進、今朝は畜生めが諸道具、孫娘二人受取申た。旅立は暇乞と見へた。お出過分。追付吉左右待申」と、云捨てよ駈出る。「いや申、御顔色も常ならず、氣遣千萬。巨細承はり届くる迄は、慮外ながら放しませぬ」思、なふ一之進、御自分江戸より下著の節、娘さるめが提首をお目に懸いで口惜い。忪甚半は其日より尋ねに出る。年寄ても忠太兵衛、腰膝立ぬ身ではなし。刀の刃に血も付ず、高枕でも暮されず一人物にも狂はれず、相手もがたと存るに、最初不義の證據を取て我等にも知らせ、國中に沙汰をした事觸は川側作之丞、彼奴を切て老後の思出、お放しやれ」と駈出る。「ア是々、御心外尤ながら、御老人の腕先、萬一件之丞に討れさつしやれば、此一之進先女敵をさし置、舅の敵を討ねば叶はず、取ませ迷惑は拙者一人平にく御了簡、御厚恩に請まする」とさし俯ば、思、なふ一之進、斯程根性の腐つた女房の親でも、忠太兵衛が討るれば、舅の敵を討氣よな」「是は曲もないお尋ね。たとへ女は畜類に成たり共、舅は舅に極つた。忠太兵衛殿、敵があらば討いでは。そりやお尋ねに及ばぬ事」思、一之進ア、御心底身に余り忝い」と大地にどうど老躰の、跪きたる感涙に、一之

涙たしなむ一涙  
の出るをこころへ

根性さげー根性  
持ちて

進も「是は」と手をつかね、涙にくれし髻、武家の道こそ正しけれ。忠「サア、婆々に逢て暇乞の盃。兄弟の娘ま一度顔も見たからふ。草鞋がけの躰、態と奥へとは申さぬ。やい、一之進のお出、皆来いやい」と呼ばれば、「ヤ中、少さい奴等に能く申付たるが、なんと吠はいたさぬかな」忠「イヤ、器用者共、其處は氣遣めさるな」と、立關に座しければ、母は二人の孫娘、左右に具して立出る。中に盃酒肴、盆正月の節振廻三人の子の誕生日、一家寄合ふ祝ひ日の、座敷は座敷にははらねど、揃はぬものは人の數、五人顔を見合せて、物をば云ぬ日禮に、涙たしなむ顔付は、泣叫ぶより哀にて、酌取る下女が袂まで、翻さぬ酒に絞りけり。母は涙のこらえ精、盡果てわつと泣き、「可愛や此の子共が父御のいひ付覺えてか、目に涙は持ながら、温順いを見るに付、彼の業人の畜生の人でなしの腹から、此様な器用な子を何として産出した。人並の根生さけてくれたらば、母も子も揃ふたり、忠太兵衛夫婦は子も孫も産揃へた、手柄者と云せぬか。娘の子は母方付と、二人計送つて、虎を残して下さるは、岩木の名字を疎み、此方とは縁を切心か、曲もない一之進。恨みに御座る」と聲を上げ、積る涙を一言に、泣盡すこそ道理なれ。「イヤ、御恨は相違、隔つる心は聊かなし。此度我等お暇下され、世の散人

すくく一すつ  
くと立

相番一同様  
番頭一武家一隊  
の長

と成たれ共、親より傳へ、今日迄樂みと致せし茶の道は忘れ難く、虎次郎めを千の休齋  
 弟子分に預け申たり。お恨み晴れられ、門出のお盃を」といひければ、「尤左こそ」と  
 打解て、隔す交す盃に、いふ事とは、「首尾能追付本望々々」其本望とは子共の母、  
 我妻を切ることを、身の悦びになす事は、いか成運、いか成時、いか成惡世の契ぞ、と  
 思へばはつたと胸塞り、鐵石の如く成、一之進が心かきくれて、覺えず涙に咽びけり。女  
 房おさるが弟岩木甚平、宿なし旅の形もやつれ、一僕具して立歸る。忠太兵衛伸上り、「ヤ  
 イく甚平戻つたか。首尾は如何じや、一之進も只今門出、何とく」とすくく立、  
 甚ヤア一之進留守の中不慮の事出来、お歸りない先不義者共が提首、此方へ見せ申せと  
 親共の心せき。我等は素より彼奴等が欠落の曉より、直にぶつ立テ、食物を腰に引附け、  
 海道筋の旅籠屋、馬次、舟場を穿鑿し、山陰在夕迄も近郷残らず尋しが、いやく足弱  
 を連れ、氣の後れたる迷ひもの、深く隠るゝ心も付まいと存じ、伯耆路へかよつて詮義  
 いたせ共出合す。つくく存すれば、相番を頼みし迄にて、番頭へも断らず、日數を經  
 るは不調法と存じ、引返し、只今歸りがけ、直に断り相濟み、ちよつと立ながら兩親に  
 逢ん爲此仕合。御自分も我等も、互に遅いか早いかで、お目にかよらずば残念たるべし。

いはれぬ遠慮—  
無用の遺慮

ありない—ない  
を強めていへり  
腹筋な—腹筋上  
る程をかしい

幸ひの折に参り逢ふ、本望達せん吉左右。いざ御同道仕らん」とぞ勇みける。一之進手を打て、「扱々御苦勞お骨折。御親子の御懇意心肝に徹し忝し。最早是より御同道には及ばず、我等一人参るからは、外を頼む事もなし。甚平殿は御休息頼み入」と云ければ、甚いやさいはれぬ遠慮。心は矢竹に存じても、人数なければ手の廻らぬ事も有。扱こそ留守の内、よもや何事も有まじと、落付ても斯様の事の出来。權三も他國に親類知音も有べし。何と構へ置も知らず。三日路四日路共踏出し、時の變にて介太刀欲い事も有べし。是非共に御同道」「イヤ是御心底頼もしけれど、女房の弟に介太刀させ女敵討ては本望でも有まいか」甚いやさ介太刀と極めず共、只力に成迄の事」と、聲高に成ければ一之進色を損じ、「扱は茶入釜の蓋取より外、人の首の取様知るまいと思召な。弓矢八幡、身こそ少身なれ、見事断れ具足の一領も用意して、すはといはど、刃鐵を鳴すお歴々にも負る事はおりないさ」甚平からくと笑ひ、「ア、腹筋な。然らば足本の女敵何故討ぬ」「ム、ウ足本の女敵とは、ム、ウ川側伴之丞が事な」甚それ程覺えのある女敵何故討ぬ」「一之進はつと驚き、「尤、彼が不義の狀數通、女が手箱にて見付、彼奴も一刀と思へ共、一時には手に及ず、先是は後日の沙汰」と、いはせも敢へず、甚それくく、鼻の先に

金輪際一奈落の  
底迄も搜すべき  
敵  
身の蜂一腔にて  
自分で身の始末  
をつけかねる

置ながら、二人の敵は手が届かず。初日の敵後日の敵といふ分ちは知らず、介太刀頼まぬといふ一之進の女敵、一人は岩木甚平が介太刀討た、お見やれ」と、腰兵糧の器引ちぎり、押開けば伴之丞が首、洗ひたてよぞ持たりける。一之進「是は」と手を打ば、舅夫婦大きに悦び、「金輪際の敵憎しといふは彼奴が事。但御扶持人、上へは、何と訴へた」いや訴へに及ず。彼奴も身の蜂拂ひかね、お暇申捨て、欠落いたす處を、因州境にて思ひのまゝに討取ました」専手柄く。なふ一之進、敵討の門出に是程の吉左右有べきか。忠太兵衛が指圖甚平を連れられい。尤いふに及ぬ事、介太刀して本討手の名に疵つけな「「畏つた。お暇」と立出んとせし處に、十計成旅人の、門柱に影かくれ、奥を覗いてちらめくを、一之進急度見やら心得ず」と走出れば、中息子の虎次郎葆々しけなる旅装束、「をのれ此態は何處へ行心入。小穢者め」と小腕取て引出す。馬イヤ父様の供して行。姉様おすては女子なり、私は男。敵討親を一人やるは武士でない」と、先に立てはしりいづ。走出るを引留め、「扱は己を産だ母を切る心か」馬母様何んの切る物ぞ。母様を連れて往た權三めを切てくれる。どふでも往く」と意地張たり。「やい、悪い合點。叔父様も父も出て行けば、祖父様祖母様お年寄、姉や捨は女郎の子。其方を跡に残すは、若し權三



月に誰云々一此  
 伏見船に寝て月  
 を見てゐるは誰  
 なるか  
 涼の文字一つく  
 りが京の字なる  
 故  
 一つ流一京の御  
 殿川と  
 茶船一酒食を商  
 小船  
 奈良茶一茶飯の  
 事三省録  
 そんじやう其處  
 一何處其處

めが来た時、切らせふと思ふ用心。随分休齋に茶の湯を習ひ、時々これへお見廻申、お二人へ孝行兄弟共に氣をつけ、權三めが来たならば切て捨てい。但一人残るが怖くば連て行ん」と宥めたらせば、庶如何にも一人残りましよ。跡の事氣遣ひせず、必手柄遊ばせ」と、聞分の能き利發者、舅夫婦は目もくれて、「女子男打揃ひ、すぐつた様な子共の成人、見たい心もなき母めは、いか成畜生ぞや。不便共思はぬ。切成共突なり共、やがて本望々々」と、涙ながらの暇乞。兄弟三人聲々に、「權三めは切殺し、母様は息災で、連て戻つて下され。さらばく父様」と、いへ共父はさらば共、いはんとすれば目もくれて、胸に八色の雲とづる、古郷はなれて三重別れ行。月に誰、寢て見よとてや伏見とは、船に寄たる里の名の、橋の夕暮来て見れば、涼しくの文字かたどりて、京を持たる京橋に、一つ流れの御祓川、末吹風も袂涼しき。權三おさるは三日共、同じ所に足とめて、居るにゐられぬ梓弓、伏見に暫し墨染の、秋の櫻か入相も、明日をば知す一日の、命々と聞捨て、難波の方に思ひ立、人目を忍ぶ乗合に、空居睡の船漕げば、傍に茶船を漕連て、温鈍蕎麥切、きりとくと押廻し、豆腐奈良茶と茶を賣るも、宇治の川水落添ひて、昔を胸に涙くむ、女心ぞ哀成。一之進は御幸の宮、甚平は三栖の里、毎日そんじやう其處其

見付るか一權三等が見付るか也

處と、相圖をしめて甚平一人、京橋の夕日影、船共を見廻し、甚ずんど早ふ出る船があらば乗たい」と、乗手に目を付け見廻せば、舟人「早い为好なら此船、初夜が鳴ると出します」甚おふいこふ狹そふな」舟人「狭い事は御座らぬ。若い旦那殿とおかよ様と笛の蔭に屈んでじや。彼の側が廣ひ。彼處に置ませふ」甚イヤ居處は如何成として居よふが、初夜といふてはもふ遅い。明日の晝船にいたそふ」舟人「そんなら勝手。船はこつちの、乗る身はそつちの。強はせぬ」と、云中に、船中とつくと見廻し、「顔は見へねど十が十、是に極つた」と、嬉しさ足も飛上れど、笛の蔭より見付るか、と態と緩々橋の上、涼む良して二三遍、心祝ひの神の鬨、一之進が旅宿へと、足を飛せて走りける。笛押除て、鬨ハツア大事の物忘れた。コレ船頭殿、此方二人は上てもらを」まゝ人に頼まれ大事の買物、銀迄受取、乗急ぎするのととんと忘れた。上てたもれ」舟人「してそれは何處迄買に往かしやる」鬨ヲ、彼は、何とやらいふ問じや。ヲ、それノ、撞木町の彼方、藤の森の先じや」舟人「ハア此方も餘程の事いふたがよい。爰から何程有と思はしやる、一里半御座る。其中に船は出て仕廻ふ。上る事は成ませぬ」と、情もなげに取合す。甚イヤ遅くば構はず共出してたもれ。二人分の運賃は拂ふて上る。平に頼む」と、北南の見世

詰まらぬ事を  
七本行「を」字な

お鳴様云々一  
いから二ツに切  
るとの洒落なれ  
ども權三等の身  
にこたへる

先、橋の上に目を放さず。舟人「爰な旦那殿は、うろくと詰らぬ事をいふ人じや。乗せもせぬ運賃取ては一分立ぬ。矢張乗て御座れ」構「それは酷い船頭殿、今の様に跡から乗手もあれば狭ふ成、平に上て下され、頼みます」と佗ければ、舟人「狭い事氣遣ひして下されな。明日の朝、大坂迄満足に届けりやよい。今宵一夜は、おか様も胴切にして、旦那殿も細々に刻んで、片付て乗せまする。其處らは構はず踏反て、のたれて御座れ」といふことも、心にかよる一つなり。おさる萬氣にかより、「ナフ船頭殿、物には情といふ事有。人に乗せず、運賃取れば船頭の一分たよぬとや。我々とても、人に銀をことづかり、其買物を渡さねば何ふも一分立難い。是手を合する、是非とも上て下され」と、詞を盡せば聞分て、舟人「そんなら早ふ上つた」構「ア、過分々々」と、二人手を引氣もせく足本。舟人「此方衆は怪我しそふな。雁木に躓き、おか様の大疵に又、疵のつかぬ様に用心々々」と、つね船頭の戯語も、今日こそ胸にこたへけれ。床の蔭に身を密め、構「甚平が爰にあるからは、一之進も此邊に居らるよは必定。サアく二人の望みなふた。覺悟あれ」といひければ、さう「ア、それは覺悟の前。國を出る其夜より、夫に進せた命、惜いとは思はね共、若し弟の甚平が手にかよらば口惜い犬死。甚平と見るならば随分と過るよが、

野郎帽子一荻野  
澤之丞初めてつ  
けたり帽子の左  
右を垂れて鍾を  
つけたもの(嬉  
遊笑覽)  
猿丸一去るまい  
れかく以下皆懸  
詞  
天智一天の罰  
菅家一勘氣  
人丸一他の人  
深養父一深敷

身を知る雨一涙  
の事

一之進殿への奉公。私や此方が心ざし、斯しても居られまひ。今夜は何處に泊らふぞ」  
 權「ハテ三柄が端か油かけか。そろく京へ成共上らふ」と、夕べの空もはや暮て、軒端  
 の軒端に灯す火は、切子燈籠いろくの、花の繪盡し判じ物。見世に涼みの芝居咄や踊子  
 の、十二三から八ツ九ツの、娘優しや黒ひ羽織の腰巻に、野郎帽子の濃紫揃ふ拍子や、  
 容態もよく、踊「それくそれくやつとせ。クドヤハエイく、難波江の、蘆の假寝の一夜  
 さへ、長き契りと結びはすれど、許さぬ戀の關の戸や。いつそ山邊と思へ共、一期猿丸と  
 の誓詞のあれば、天智天王罰おそろしく、親の菅家もそこはかとなく、余所の人丸頼ま  
 れずして、直に大江の千里を越へて、凄き深養父中押分て、たんだふれくな爰で切れ  
 さ」踊る姿の懐しや。まゝ「ナフ彼の踊子を見るにつけ、國の子共も彼の年配。生たか死ん  
 だか煩ふか。可愛や今年は踊るまひ。離れぐに成果て、何處で死んでも淺ましい。子共  
 の水も受まひ、湯灌葬禮誰がせふぞ。逆もなら今死んで、此燈籠を六道の、中有の明り  
 に迷ひを晴れ、せめて未來が助りたい」と、歩きくの口説言、男も心かき曇り、空に  
 今年の日照にも、袖には誰が雨乞の、身を知る雨ぞ果しなき。一之進が嗜む備前國光、運  
 こそ來れ我妻に、此世の縁は薄柿の、帷子高く捻袷け、甚平とは跡先に、引別れたる夕

北一来たにかく  
笹の權一七行  
本笹の權三か

十番切一曾我夜  
討の十人切、  
その名は三升屋  
二三治戲場書留  
に出たり

足取一足踏

橋はさながら云  
云一稀なる夫婦  
の固めにらふ、  
梁は千載一遇

のたうつ一苦み  
もがく

べの雲、時は冥途の酉の下刻、運こそ北の橋詰にて行合ふたり。二「笹の權三、淺香一之進が女敵覺えたか」と、いふより早く打かくる。權三、待受たり」と指上る、弓手の小腕、水もたまらず切落せば、飛退去て、權三、武士の役、作法ばかり」と一尺八寸、抜合せ、刃向ふたり。處の人「スハ暴れ者、切たはく。喧嘩よ棒よ、踊子共に怪我さすな」お吉様ア「おせん様ア」半兵衛ヨ「權三ヨ」人を呼ぶやら、隣丁八丁九丁町、十番切の五月箇、夜討の入たる如くなり。女は甚平をちらりと見て、「望みは夫の切先、弟に討れ犬死」と、暫し身を引橋の影。權三が踏込み、打切先、欄干に切込で、喰へ留たる刀を捨、權三、エ、竹がな一本。一手遣ふて、權三と名を取し、諸人の形見に遺さんもの。足取なりとも見物せよ」と、刃を潛る無刀の働き。さすが成ける手負振、一生一世と念力に、切込んだる右の肩先、胸板を筋かひに、はらりずんと切れても猶身を引ぬ最後の身振。橋はさながら紅葉の、まれに逢ふ瀬の敵と敵、踏込みく、五刀、切られて仰反に返せ共、武士の死骸の見事さや、迹疵更に無りけり。一之進女を見失ひ、「南無三寶」と北へ走り南へ戻り、何處へ失せた、と小角くを、唐猫の鼠を探す眼の光り。橋には死骸のたをうつ。折しも七月中旬、血は流れてとうくと、月こそ浮べ伏見川、龍田の

肝先踏へ云々  
胸先を踏へて刺したる刀にて我足をも買いた  
谷の笹原―谷の笹生に消えぬ白雪―の歌をとりて消滅せぬ意

川とぞまがふたる。甚平姉を引ッ立來れば、さる「エ、介太刀の其方に討るとは口惜い。夫の手にかけくれまいか」葦ヤ一の進程の仁、誰が介太刀を討物ぞ」と、橋の中へ突出せば、さる「なふ懐しや」と寄る處を、片手なぐりに腰の番ひ、くはらりずんと切下られ「あつ」と計に臥したりける。帯引摺んで頬引上げ、見れば子共の不便さと、憎くし憎しの恨みの涙、胸に浮む所を打拂ひ、ずんと切下け取て引伏せ 肝先踏へぐつと刺たる我切先、右の跟を蹴かけ、すつばと切れ共覺へばこそ。直に男が胸板踏へ、留めは何れも一刀、鑢の權三が古身の鑢、疵も古疵咄も古し。歌も昔の古歌なれど、谷の笹原一夜さ咄、其鑢の柄も永き世の、御評判とぞなりにける。